

障害児教育カリキュラム支援の在り方

障害児教育のカリキュラムセンター基本構想

障害児教育研究会議

研修員 荒井 真理（川崎市立養護学校） 佐藤 寿子（川崎市立聾学校）
高橋 玲子（川崎市立田島養護学校） 谷口 弘子（川崎市立東桜本小学校）

指導主事 上杉 忠司

主題設定の理由

障害児教育では、地域や学校の特色を生かした学校・学級のカリキュラム作りとともに、一人一人の教育ニーズに応じたカリキュラム作りが求められている。しかし、聾養護学校や障害児学級に在籍する児童生徒は、重度重複障害・不登校・非行傾向など多様な教育ニーズを抱えている。その多様な教育ニーズに応えるため、教育ばかりでなく、心理学や医療に関する知識も含めた障害児教育の広い専門性が要求される。ところが、川崎市の障害児教育の現状においては、聾養護学校や小・中学校の障害児学級では、毎年 100 名近く障害児教育の経験のない教員が新しく担任となり、最初に『児童生徒の状態像を把握して個に応じた独自のカリキュラムを作成しなければならない』という最も困難な壁にぶつかる。そのため、新担任者に対して必要とする情報を効率よく提供し、各分野の専門家や専門機関と学校との連携を図り、障害児教育のカリキュラム作りを支援するシステムが不可欠である。従って、本研究会議では、障害児教育カリキュラム支援の在り方について研究し、障害児教育のカリキュラム支援センターの基本構想を提案していきたいと考える。

研究の内容

1. 研究の流れ

障害児教育カリキュラム支援の基本構想検討

基本構想に基づいたカリキュラム支援ニーズのアンケート調査を実施

アンケート調査を基に、カリキュラム支援の基本構想の再検討

2. 研究の内容

(1) 障害児教育カリキュラム支援の基本構想検討

はじめに本研究会議では、カリキュラム支援を以下 3 つに整理して捉えた。

聾養護学校や障害児学級の教育課程作成支援

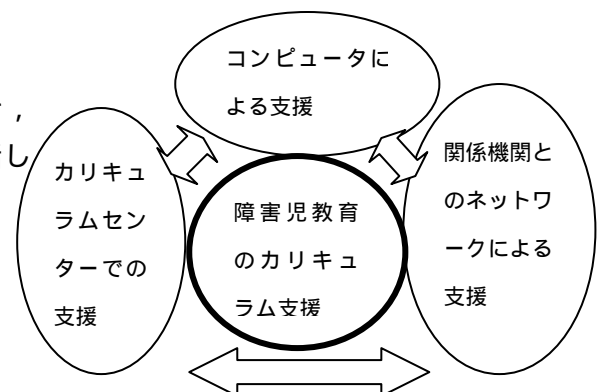
個別教育計画作成支援

題材や単元の指導計画や授業計画支援

さらに、上記の 3 つのカリキュラム支援を行うとき、川崎市の特色を生かしてどのような支援ができるか話し合い、具体的に 3 つの支援の仕方を考えた。

カリキュラムセンターでの支援

コンピュータによる支援



関係機関¹とのネットワークによる支援

(聾学校養護学校・たんぼぼ学級ことばの教室による支援)

次に、それぞれの支援の特色を明らかにして、
どのような支援が可能か考えてみることにした。

<それぞれの特色を生かした障害児教育カリキュラム支援の基本構想>

	聾養護学校や障害児学級の教育課程作成支援	個別教育計画支援	授業計画支援
カリキュラムセンターでの支援	大学や研究機関とのカリキュラム共同開発 カリキュラム編成相談	児童生徒の状況理解 アセスメントの実施と結果報告	教科領域毎の指導案集 題材や教材の紹介 教材に関する情報 教材作成コーナー
各種専門職情報の集積	学校・学級の特色 カリキュラム評価 先進校の情報(研究冊子・授業ビデオ)	目標の立て方 授業プランの立て方 評価方法	
コンピュータによる支援	学習指導要領等の情報(自立活動・総合的学習) 特色ある先進校のカリキュラム情報	障害に関する医学情報 先進校の個別教育計画の情報 個別教育計画のてびきの公開	優れた授業実践情報 教材情報 教科領域毎の題材や指導実践に関する情報 各種ワークシート
手軽に利用できる			
関係機関とのネットワークによる支援	聾学校 難聴学級担任への支援 養護学校・たんぼぼ学級 知的障害児・情緒障害児・肢体不自由児学級担任への支援 重度障害児担任支援 ことばの教室 ことばに関するアセスメントの実施	聾学校 聴能に関するアセスメント 養護学校・たんぼぼ学級 アセスメント用具の貸出 ことばの教室 ことばに関するアセスメントの実施 就労や余暇活動に関する情報	聾養護学校 たんぼぼ学級 教材貸出 施設の提供 単元題材の開発 研修講師 ことばの教室 ことばの指導法の研修 講師 教材貸出 単元題材の開発
教員の専門性 指導実践 教材教具 人材			

(2) カリキュラム支援ニーズのアンケート調査の実施

カリキュラム支援の具体的なイメージを基にアンケートを作成し、利用する先生方がどのようなニーズを持っているのかを調査した。

対象：研修員の所属校 76 名(聾学校 15 名、養護学校・田島養護学校 57 名、東桜本たんぼぼ学級 4 名) 個別教育計画に関する研修会参加者 26 名(希望者のみ) 総計 102 名

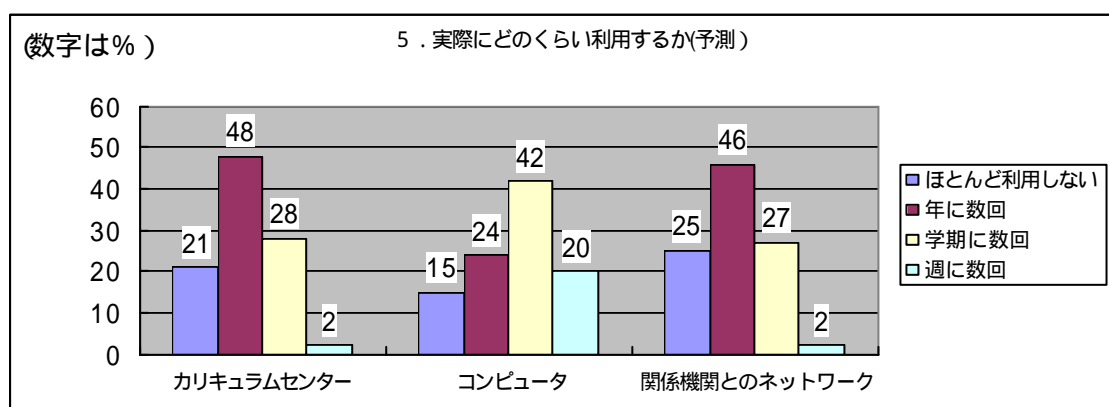
方法：研修員が説明しながら質問紙に記入。

集計：各項目で「よくあてはまる」「○あてはまる」をつけた人数を集計。

¹ 聾養護学校・たんぼぼ学級・ことばの教室等のカリキュラム支援が可能な教育機関

< アンケート結果 >

1. カリキュラム作成時に活用している情報		2. カリキュラムセンターへ行って求める支援	
児童生徒の実態	96%	教科 領域ごとの指導案	72%
昨年のカリキュラム	86%	専門的検査	68%
同僚先輩のアドバイス	75%	教材教具の貸し出し	66%
地域や家庭の情報	59%	教材作成コーナー	65%
他校先進校の実践	51%	先進校の情報 (研究冊子等)	63%
学習指導要領や解説書	46%	先進校の情報 (授業ビデオ)	60%
研修会	43%	ビデオ	58%
本や雑誌	41%	本や雑誌の貸し出し	52%
		カリキュラムづくりに関する相談	50%
3. コンピュータを通して求める支援		4. 養護 たんぼ・ことばの教室に求める支援	
教材に関する情報	80%	児童生徒理解の相談	67%
教科領域ごとの指導段階表	75%	授業計画や指導法に関する相談	64%
障害に関する医学的情報	75%	授業実践の公開	62%
特色ある先進校の実践	63%	教材や教具の貸し出し	58%
本や雑誌の紹介	62%	言葉や聴力や補聴器に関するアセスメント	57%
学習指導要領に関する情報	58%	就学や進学に関する相談	51%
研修会の案内	54%	校内研修をオープンにする	38%
優れたホームページの紹介	43%	施設 設備の開放	36%
メールによるカリキュラム相談	31%		



< 結果の考察 >

カリキュラム作成時には「児童生徒の実態」や「昨年のカリキュラム」や「同僚や先輩からのアドバイス」などの情報を活用している人が多く(75~96%),「先進校の実践」「学習指導要領」「研修会」「本や雑誌」などからの新しい情報を活用している人は51%以下であった。その結果から、カリキュラムを改善するためには、新しい情報を提供するカリキュラム支援の必要

性を感じた。また、コンピュータによるカリキュラム支援の項目では、学習指導案や研修会に関する情報のニーズが高くなっており、情報が利用しやすく提供されれば活用したいという潜在的ニーズの高さも予測される。

「カリキュラムづくりに関する相談」のニーズは低い（50%）が、「児童生徒理解に関する相談」や「授業計画や指導法に関する相談」など具体的な項目になるとニーズは高い（64～67%）。またカリキュラムセンターより聾養護学校等への相談の要望がやや高い。カリキュラムに関する相談という漠然としたものより、「児童生徒理解に関する相談」「教科・領域毎の指導段階に関する相談」など具体的に示すことや、気軽に相談できる雰囲気工夫が必要である。

「教材に関する情報」（80%）や「教科領域ごとの指導案」（72%）や「指導段階表」（75%）など、授業に役立つ情報へのニーズの高さが伺える。

実際の利用予測を尋ねたら、予想外に頻度が少なかった。利用される先生方は、学校週5日制になってなかなかカリキュラムセンターを利用できる時間的な余裕がないのが現状であろう。そのため、イントラネットやインターネットでつながっている総合教育センターのホームページを活用し、コンピュータによるカリキュラム支援が現実的な支援の中心となると思われる。

（3）アンケート結果を基にカリキュラム支援の在り方を再検討

再検討の柱

- ・コンピュータを使ったカリキュラム支援を中心にする。
- ・学習指導要領や先進校の実践や研修会の新しい情報を利用しやすく提供する。
- ・指導に役立つより具体的な情報提供を中心にする。
- ・カリキュラムに関する相談をより具体的に紹介し、相談が気軽にできるようにする。

<カリキュラムセンターでの支援>

ほとんどの教員が、児童生徒の実態を基にカリキュラム作成を行っている。また、児童生徒理解の相談ニーズも高い。児童生徒の実態把握や児童生徒理解が深まれば、より質の高いカリキュラム作成につながる。なかでも最近増加傾向にある重度重複障害の児童生徒や二次的な心理的課題を併せ持つ児童生徒の理解は、困難であり、専門的なアセスメントが必要になる。

そこで、カリキュラムセンターでの支援としては、指導主事・心理職・作業療法士・理学療法士等の専門職を活用した『専門的なアセスメント²による児童生徒理解相談』という支援が中心になるのではないだろうか。

また、学校の多忙さを考えた時、相談者が学校に出向いて校内で相談を行う出張型の相談ができれば、相談がより身近になり利用ニーズは高くなると思われる。

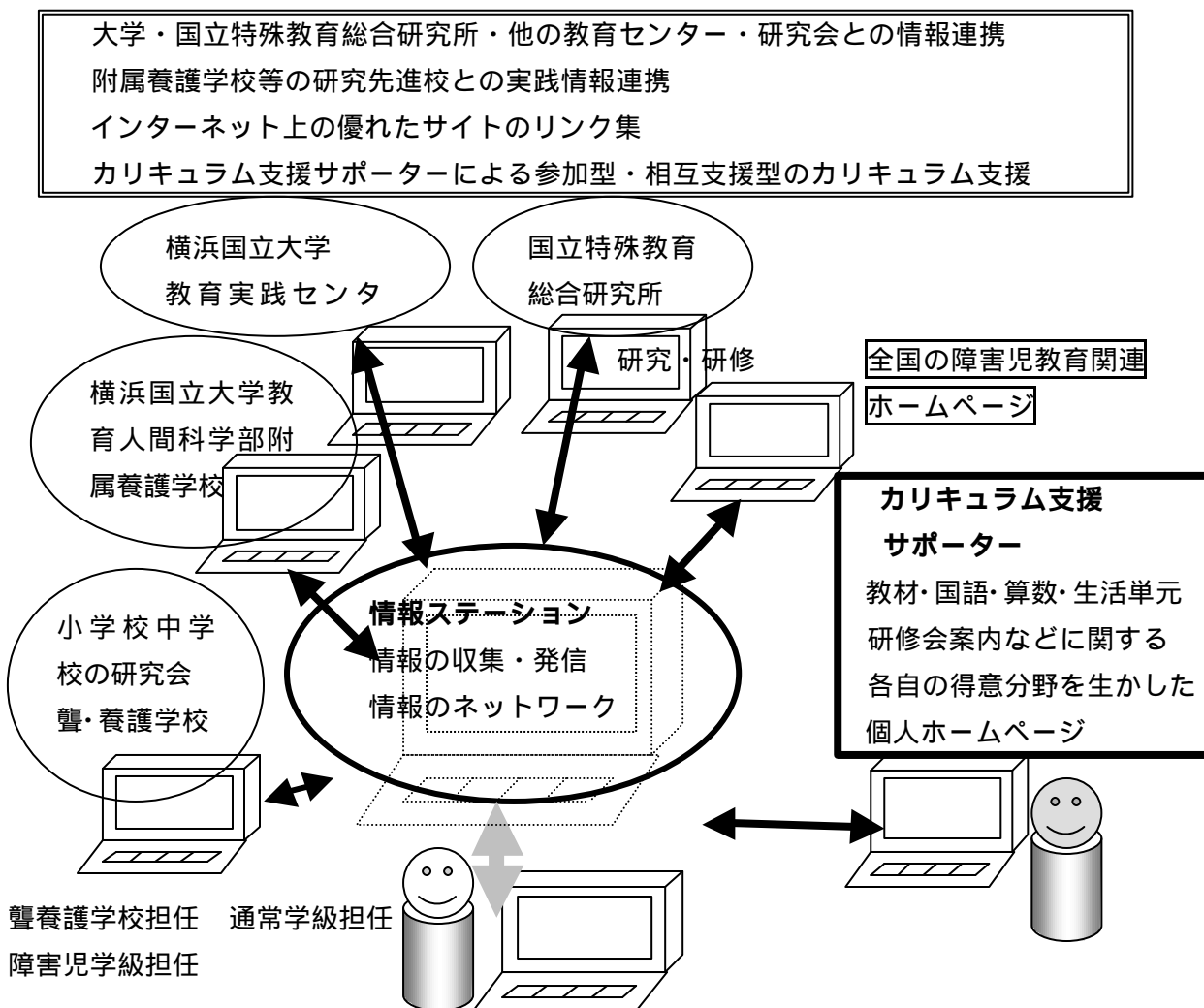
また、コンピュータでは配信するのが難しい情報を集めた『指導案や指導実践ビデオ紹介コーナー』も必要であろう。

児童生徒のアセスメントを実施し、それを基にした児童生徒理解に関する相談
学級運営や児童生徒理解や指導法に関する出張相談
優れた指導実践情報（指導案・指導実践ビデオ）コーナー

² アセスメント 児童生徒の状態像を的確に捉えるための各種検査や評価

<コンピュータによる支援>

カリキュラムセンターは、全国の様々な機関から最新の情報が集まってくる場所でもある。情報発信の基地としては最良の場であるが、川崎市総合教育センターの障害児教育スタッフの現状を考えた時、コンピュータによる支援は、情報を作り出すのではなく、情報を収集・整理し、効率的に提供する『情報ステーション』としての機能が現実的だと思われる。具体的には、次の図のような情報連携が考えられる。なかでも、川崎市の専門性を持った教員を『カリキュラム支援サポーター』として任命し、各自が得意とする分野を担当し、カリキュラム支援のホームページを運営する組織作りが必要と考えている。これにより、単に総合教育センターからカリキュラム支援情報を提供するばかりでなく、市内の教員からもカリキュラム支援情報を発信することで参加型・相互支援型のカリキュラム支援になるのではないだろうか。その方が、利用者のニーズに合ったカリキュラム支援が行え、新しい情報を提供できるカリキュラム支援となることが期待できる。



<関係機関とのネットワークによる支援>

川崎市には、様々な障害児教育の教育資源（聾養護学校・たんぽぽ学級・ことばの教室等）がある。また、「盲・聾養護学校の学習指導要領」や「21世紀の特殊教育の在り方について（最終報告）」では、聾養護学校について『障害児教育の地域における障害のある児童生徒の教育のセンター的機能』が明

記されている。そこで、これらの教育資源をネットワークで結んだカリキュラム支援を提案していきたい。

聾養護学校・たんぽぽ学級・ことばの教室（以下、聾養護学校等と表記する）では、充実した施設や多くの教材教具がある。また、聾学校には、聴能に関するアセスメントや専門的な指導ができる教員がいる。養護学校やたんぽぽ学級には、重度・重複障害の児童生徒に対する自立活動の指導実践の蓄積があり、個に応じた指導の経験豊かな教員がいる。さらに、生活単元学習や作業学習の指導実践の積み重ねがある。ことばの教室には、ことばに関するアセスメントや専門的な指導ができる教員がいる。この川崎市の教育資源を必要とする人につなげるネットワークが大切である。

具体的な支援としては、施設の開放や教材教具の貸出しが考えられる。また、児童生徒理解や指導法に関する相談のニーズが高いことから、校内に自立活動担当者か教育相談担当者を選任し、業務に支障の無い範囲で相談に応じられる体制作りが望まれる。また、授業研究会等を公開することで、児童生徒理解の仕方や指導方法について情報発信したり、夏季休業期間中に障害種別の指導法の研修・教材作りの研修・生活単元や作業学習に関する研修を実施したり、などの支援が考えられる。また、聾学校やことばの教室には、専門性を生かした聴覚やことばに関するアセスメントが期待される。

また、カリキュラム支援ネットワークを構築するためには、カリキュラムセンターが、聾養護学校等に対して、各機関の支援情報を広報したり、支援を希望する人を紹介したり、各機関の相談担当者の研修を行ったり、研修のノウハウを提供したり、などの支援を行うことが必要と考える。

そして、聾養護学校等の教員が、自分たちの専門性を生かしてカリキュラム支援を行うことにより、自分たちの教育実践をさらに深め、専門性を高めることにつながると期待する。

施設の開放，教材教具の貸出し・作成支援

自立活動担当または教育相談担当による児童生徒理解や指導法に関する相談

校内研究会を市内に公開し，児童理解やそれに応じた指導実践を発信

校内資源を生かした研修実施

本研究を進めるに当たり、貴重なご指導、ご助言をいただきました金子健先生並びに研修員の学校の校長先生はじめ教職員の方々に心よりお礼を申し上げます。

【参考文献】

- | | |
|---------------------------------|-------|
| 『盲学校・聾学校及び養護学校の学習指導要領解説 総則編』文部省 | 2000年 |
| 『21世紀の特殊教育の在り方について（最終報告）』文部科学省 | 2001年 |
| 『今後の特別支援教育の在り方について（中間まとめ）』文部科学省 | 2002年 |
| 『今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）』文部科学省 | 2003年 |

【指導助言者】

明治学院大学教授（川崎市総合教育センター 専門員）	金子 健
---------------------------	------